

少女小説にみるアメリカ消費主義  
American Consumerism in Fictions for Girls

岡谷 慶子  
Keiko OKAYA

マス・マーケットが出現した 20 世紀初頭から、欧米の少女文化は変容をきたした。民主主義から家庭内の女の子の地位も向上し、彼女たちにも家計の消費がふりむけられるようになり、少女は産業の新たなターゲットとなる。彼女たちは消費社会の中でアイデンティティを模索し、モードやブランドを意識する。そして大人の規制よりも仲間と同じ文化を志向する。また少女は資力を持たないながらも、親にねだって買ってもらい、その欲望を達成する。

産業化が進む 20 世紀初頭に相次いで出版された孤児の人気者の主人公が少女の物語群では、主人公たちはみずぼらしい身なりで登場するが、きれいなドレスを手に入れ身につける。彼女たちの幸福感は新しいドレスの所有によって生み出されるところが大きい。これらの作品の作者たちは自立心旺盛で個性豊かな主人公から、こと服飾に関しては虚栄や他人志向をそぎ落とすことはしなかった。つまりファッションの消費主義は少女の人格に織り込まれているのであった。

昭和 30 年代に一斉を風靡した秋元書房「ジュニア・シリーズ」の、前半は村岡花子監修で外国翻訳小説が主にラインアップされていて、その表紙絵は映画のスチールかファッションナブルな白人の少女の肖像が描かれていた。その装丁に魅かれて購入した読者も少なくない。<sup>i</sup> 外国翻訳小説があればほど人口に膾炙したのは、この洋装に象徴される西欧文化への憧れが大きかったのではないか。少女の読み物にはファッションの描写が欠かせない。昭和 30 年代半ばには日本も大量消費の時代を迎え、洋裁がブームとなり、衣服が着るものから装うものへと変わっていった。<sup>ii</sup> 昭和 40 年代になると少女雑誌では小説は衰退し、マンガ、ファッションが主流になる。本稿では少女小説において日本の少女のおしゃれ願望にアメリカの消費主義が絡んでいると仮定し、少女小説に見られる少女たちに浸透した消費主義がどのように提示されているかを見る。

先行研究としてはピーター・ストンリーが 19 世紀後半から 20 世紀前半までのアメリカの少女小説に描かれた少女と消費主義の関係を論じているが、国内では児童文学と経済学を結びつけた考察は未だ進んでいない。

欧米に目を向けるとファッションのモードとは元来はもっぱら王侯貴族の世界の現象だったのだが、産業革命と共に、衣服の大量生産化が進み、一般市民にも浸透してきた。織物産業の発展は綿製品から始まり、他の織物にも発展した。機械化が織物生産の効率を高め、市民の生活を一変させた。

19 世紀前半は少女のファッションは成人女性の縮小版に過ぎなかった。1846 年にはミシンが発明され、1870 年代に普及すると型紙の考案とともに、高い仕立て屋に頼らずとも、素人でもつるしの服よりも安く流行の高級そうな服を作って着ることを可能にし、またたく間に世間に流行を伝播させる促進力となった。

19 世紀後半は紡織技術の発達と流通の低廉化で少女服のファッションの装飾性は頂点を極めた。その後、女子教育の発展で華美な装飾性は衰退し、動きやすいデザインが取り入れられるようになった(Forman-Brunell 128 頁)。

マス・マーケットが出現した 20 世紀初頭から、アメリカの少女の文化は変容をきたした。民主主義から家庭内の女の子の地位も向上し、それなりの消費がふりむけられるようになり、少女は産業の新たなターゲットとなる。彼女たちは消費社会の中でアイデンティティを模索し、モードやブランドを意識する。そして大人の規制よりも仲間と同じ文化を志向する。また、少女は資力を持たないながらも親にねだって買ってもらう。トレーディング・カードや子供雑誌の広告主は子どもを狙っていた。だが、上流家庭の子女でもない限り、わがママがすべて聞き遂げられるわけではない。下層階級や孤児の境遇ならなおさらである。本論では、まず、20 世紀以前の少女小説で消費行為がどのように描かれているかを見て、次にハーロックの『衣装の心理学』を援用しながら、女の子のおしゃれ願望の心理を解明し、それらの孤児物語を取り上げ、ヒロインたちのモードに対する希求がどのようにかなえられていくのかを分析してみたい。

### 『若草物語』

『若草物語』の邦題で知られる *Little Women* (1868) は今でも読まれている少女小説の古典である。南北戦争を背景としたボストンの中流家庭のマーチ家の四人の娘たちの成長を描いている。アメリカ北部でも階級差は歴然としていて、貧富の格差は激しい。マーチ家では父親が従軍牧師として家を空けており、ハンナという使用人をひとり置いているが、困窮しているのにキリスト教の慈愛精神からもっと貧しいドイツ移民の隣人を援助したりしている。マーチ家の周囲にはインド貿易で財をなした老ロレンスがいて、上流家庭の家庭教師をしている長女マガレット(メグ)には裕福な知り合いが多い。質素に育てられているマーチ姉妹の中でも一番女らしいメグは物質的な欲望から逃れられないでいた。友人のひとりサリー・モファットとの付き合いはメグの虚栄心をくすぐる。続編 *Good Wives* (1869) でジョン・ブルックの妻となったメグはつつましく家政を切り盛りするが、ついに我慢しきれなくなりコマーシャルイズムの餌食となっていく。

そしてサリーは全く悪気はなしにメグに実力以上のことをさせるように誘惑してしまったのである。折悪しくその店員が震えるように光る美しい反物を

取り上げて「掘り出し物でございますよ、奥様」と言ったものだ。彼女は「いただくわ」と答えた。布地は裁ち切れ代金も支払われた。サリーは大喜びだった。メグは大したことでないというように笑った。そして何か盗みでもして警官に追いかけてられでもするかのように感じながら、大急ぎでそこを立ち去ったのである。

家へ帰った時、彼女はその美しい絹地を広げて良心の呵責を和らげようとした。しかしその布地はさっきほど銀色にも光らず、結局自分には似合わないものであった。あまつさえ「50ドル」という言葉がどこを広げてみても模様のように押されているように思われた。(61-62)

身の丈を超えた衝動買いにメグの心は新調のドレスにも、もはやときめくこともない。後ろめたさにさいなまれ夫に無駄遣いを白状し、貧乏の不満を口にし夫のプライドを傷つけたメグは激しい後悔の念に囚われる。夫が残業を増やし、外套の新調の注文をキャンセルするに至って、メグは自分の過ちの重大さを知る。結局、メグはサリーに件の布地を買い取ってもらうことで夫の外套の代金を取り戻し、寛大なサリーはずっと後になってその布地をメグにプレゼントするのであった。『若草物語』は全体が『天路歷程』の形式を踏んでいて少女たちに様々な誘惑、悪の誘いが用意されている。そのような誘惑に負けて地獄を見るか、はねのけていく強い意志を培うかというキリスト教的教訓が、愚かな娘たちの生き生きとした心理描写とともに全編に貫かれている。

### 『あしながおじさん』

消費主義が進行する20世紀初頭には数々の孤児の人気者の主人公が少女の物語群が出版された。そこでは、主人公たちはいずれも例外なくみずぼらしい質素な身なりで登場するが、さなぎが蝶に変身するように、シンデレラが魔法使いの老婆から与えられるように、きれいなドレスを手に入れ身につける。

ウェブスター作『あしながおじさん』のジルーシャ・アボットは作文の才能が認められて、孤児院の評議員から奨学金を受けて名門女子大に進学するという境遇の変化から物語は始まる。孤児院出身で粗末なギンガム・チェックの制服しか着たことがなかったジルーシャは、匿名の後見人「あしながおじさん」からの送金で六着ものドレスを新調する。ジルーシャことジュディの美しいドレスに対する飢えと憧れは、人一倍強いのだが、彼女の場合、中学校にあがってからクラスメイトの古着を着せられたという心的外傷的な体験が、その欲望の免罪符となっている。彼女の激しい衣装熱はそのような不遇時代の代償であるとされる。

惨めな慈善箱からの服を着て登校するのを私がどんなに恐れたか、おじ様にはおわかりにならないでしょうね。私はきっとその服の最初の持ち主の隣の席

につかされるに決まっていました。そしてその女の子は友だちにひそひそ話をしたり、くすくす笑いをしたりして、私の服を皆に指さすのでした。自分の敵の捨てた服を着せられる辛さは私の魂に深く食い入るのでした。その痛手はたとえこれから残る生涯を絹の靴下を履いて過ごしたとしても、忘れることができるとは思えません。(13)

『あしながおじさん』にはジュディの手紙に「買い物をして女になる」<sup>iii</sup>というイデオロギーが如実に現れている。人並みに幸せになるためには投資して、男性に選ばれる女性になるためにはドレスや装飾品にお金をかけなければならないのである。

おじ様はご自分が女でなくて良かったと思いませんか？おじ様はきっと私たちの着物のことでの大騒ぎは、あまりに馬鹿げていると思っていらっしゃるのでしょうか？そうですとも、そうに違いありません。でもこれは全く男性側に罪があります。

おじ様は、不必要な装飾を軽蔑すべきものとして実用的な衣服を女性に勧めていた学識ある教授のことをお聞きになったことがおありですか？その学者の奥様は従順な夫人だったので、その改良服を着用していたのです。ところがその結果、旦那様はどうしたと思います？コーラスガールと駆け落ちしたんですって！(72-3)

『あしながおじさん』が初めて掲載されたのは *Lady's Home Journal* という中流階級の女性に生活スタイルを提案する雑誌で、当時百万部も売っていた。<sup>iv</sup> 広告ページも多く、すみれクリームやカスティューユ石鹸を買わなければ一日でも楽しく暮らせない、などという女子大生の価値観、消費主義は、それら広告と共に雑誌の編集方針に沿い、女性読者の啓発になっていた。

### 『赤毛のアン』

消費主義はアメリカの都会の女子大生だけでなく、カナダの田舎の孤児の少女にも波及していく。『赤毛のアン』はスコットランド系カナダ人のルーシー・モード・モンゴメリーの作品ではあるが、出版元はアメリカのボストンにある L C Page 社なので、読者層は同時代のカナダのみならずアメリカの少女文化を反映し、影響していると考えてよいだろう。日本の少女たちにも愛された『赤毛のアン』では、アンの美しいドレスへの欲望が遂げられるまでには相当時間がかかる。

ブライトリバー駅まで養子を迎えに行ったマシューを待ち受けていたのは少女アン・シャーリーであった。彼女は寄付の生地で作ったぼろぼろの綿と毛の交ぜ織りの孤児院の制服を着込んでいた。馬車にマシューと同乗したアンはスモモの花を見て、白いドレスを着た花嫁を連想して少女らしい夢を語る。彼女には孤児という境遇に加えて生まれつき赤毛という強い容姿コ

ンプレックスがあり、なおさら美しいドレスという補償を求めていることがわかる。後にアンは人から赤毛のことを口にされると、激しく反発する。

ジルーシャは後見人からの送金で、身なりに関しては過去からの決別を果たすが、アンの場合、マリラの吝嗇と厳格主義のおかげで皆と同じ服装ができず、過去の悩みをひきずる。マリラというキャラクターはケート・ウィギンの『サニーブルック農場のレベッカ』の厳格なオールド・ミスのミランダおばさんを踏襲したものだと考えられる。レベッカは孤児ではないが、子沢山の家から子どものいない独身のおばたちの農場に預けられている。ミランダおばさんの方針で自分の服を縫わされている。ジェーンおばさんは寛大で理解があるが、ミランダおばさんはピューリタニズムに凝り固まっている。

「見目より心ですよ。レベッカは器量が良いために憂き目を見るなんてことは決してありません。それは確かです。ですから外見をる気にするように仕向ける必要はちっともないんです。本当にこの子はこのごろ孔雀のように虚栄心が強くなりましたね。何も自慢する種がないくせに」(67)

17 世紀前半、宗教的理想としてのピューリタニズムがイギリスの社会的規範に成り代わって、衣服は装飾性をはぎとられ、ピューリタンの衣装はくすんだ色調のものというイメージが定着した。クロムウエルが打倒され、社会の規範が一変すると衣服は虚飾が志向されたが、服装のピューリタニズムはアメリカ初期の入植者のスタイルになった。転じてアメリカの消費主義を否定する立場を総称的にピューリタニズムと呼ぶ。しかし否定されるべきはそんなマリラの吝嗇と禁欲主義であった。以後アン欲望の勝利とマリラの敗北というプロットが展開する。

アンはクスバート家にひきとられることになったが、マリラがアンのために新調した服はどれも丈夫がとりえの流行とは無縁な寸分のゆとりもない、少しも「可愛くない」ものだった。アン不満にマリラは腹を立てる。

「私にはね、可愛いドレスを作ろうなぞと気を使っている暇はありませんよ。最初に言っておきますが、虚栄心を育てる気はありません。この服はどれも上等で、ごてごてしてなくて、フリルやすそ飾りがなくて実用的だよ。この夏は、この 3 着だけだからね。茶色のギンガムと青のプリント地は、いずれ学校に通うようになったら通学用にしなさい。サテン地のは、礼拝と日曜学校用です。汚さないように、きれいに着て破くんじゃないよ。孤児院から着てきたあのつんつるてんの交ぜ織り服に比べたら、何だって有難いはずだよ。」

「もちろん感謝しているわ。でこのうちの一着でもパフ・スリーブにしてくれたら、もっと感謝したのに。今パフ・スリーブがとてものはやっているから、うれしくてどんなにわくわくしたかしれないわ」

「わくわくなんかなくていいよ。パフ・スリーブなんぞに無駄遣いする生地を持ち合わせはないからね。第一あんなちょうちんみたいな袖、馬鹿げてるよ。」

私はさっぱりしてごてごてしてない袖がいいね」

「でも私一人がさっぱりしていてごてごてしてないよりも、皆がそうしている時は、私も一緒になって馬鹿げているほうがいいわ」(69)

ところが新しく編入したクラスにいる女の子たちは全員流行のパフ・スリーブだったので、アンは生きがいを見失うほどの疎外感を覚える。アンはなぜかパフ・スリーブにこだわるのだろうか。人は社会のほかの人々が彼よりも勝っていると感じる時、順応が個性をしのぐ。(Hurlock 38 頁) 若い乙女が渴望するのは美しさと賞賛である。アンは赤毛で、そばかすだけでなく、緑色の目でやせっぽちという容姿に強いコンプレックスがある。それに加えて彼女の孤児院育ちという境遇が、社会での承認を勝ち得るために、流行に順応したい彼女の願望をさらに強める。そしてこの流行の服の獲得により、クラスメイトと同化し、仲間入りを果たせた満足がすなわち少女の幸福感なのである。

ハーロックによると思春期の始まりから十六歳かもっとあとまで続くこの集団行動への順応は、特に服装によく表れる。手本に細部まで従い、そこから逸脱することで本人にこれほど強い苦悩を起こさせる時期は他にない。そんなアンを節約と禁欲主義に凝り固まったマリラは知る由もない。マリラは最初のころは義務感で引き取った養女のアンに同情はあっても愛情は薄かった。アンは流行であればパフ・スリーブでなくてもよかったのかもしれないが、パフ・スリーブは当時少女だけでなく大人の女性のトップ・モードだった。新しい牧師夫人も新任のステイシー先生もパフ・スリーブを着ていた。のちのちまでマリラの流行への無頓着はアンを不満にしておく。だが、ある日女性の服装などにまるで疎いマシューがアンを周囲の少女たちとの差異に気づく。その袖の形ばかりか色彩がまるで違う。アンは簡素で地味な服装はオールド・メイドそのものである。実際はアンを服装に関してマシューが推し量るほど、マリラに深い意図はなかった。子女の服装は家庭の経済力を反映するが、アヴォンリーの農家としてカスバート家の経済力はバリー家と大差ないとしたら、アンとダイアナの違いは養女か実の娘かというだけである。マシューは、クリスマスにアンに流行のドレスを一着プレゼントしてやろうと一計を案じる。ところが、彼は生来のはにかみやなので、一人では陰謀がうまくいかず、やむなくリンド夫人に頼ることにする。

リンド夫人の考えは既婚夫人だけあってもとうがっていて、オールド・ミスマリラに対して批判的である。

あのかわいそうなアンが一度はまともな身なりをしないと、本当にほっとするよ。マリラが着せるものといったら、どう見ても馬鹿げているからね。まったく。はっきり言ってやろうと何度も思ったが、あんなみなりをアンにさせて、へりくだりの精神を養おうとしているつもりだろうが、かえってねたみや不平心が養われるよ。あの子はきっと他の子と違うことを気にしていただろ

うよ。(166)

リンド夫人の仕立てたドレスは、パフ・スリーブばかりでなくフリルやシャーリングやピンタックやレース、リボンといった余剰の装飾がふんだんにほどこされていた。マリラの服の実用性、機能性とは対極をなす少女性そのものの表象である。その余剰は非経済性、生地潤沢さを求めるばかりでなく、作り手の手間隙ひいては愛情のバロメーターとなる。マリラはドレスに感激するアンを見て嫌味を言うが、先に引用した『レベッカ』のミランダおばさんのせりふと酷似している。

「何か兄さんが馬鹿なことをたくらんでいるなどは思っていたけどね、やれやれアンにはもう服はいらないんですよ。この秋は、暖かくて上等な生地で、実用的なのを三着こしらえてやりましたからね。これ以上は贅沢というものですよ。このちょうちん袖の大きいこと、両袖の生地で、上着が一枚作れますよ。あの子は今孔雀みたいに見栄っ張りなんですからね。でもこれで、あの子もさぞかし満足でしょうよ。ここへ来てからあのくだらない袖がほしくて仕方なかったんですからね。もっとも最初にねだったきり、二度と口にしなかったけどね。あの袖も大きくなる一方で、ますます馬鹿らしいことだよ。近頃じゃ、まるで風船みたいじゃないか。きっと来年はパフ・スリーブスリーブのご婦人は、体をはすにしなければ、戸口の出入りができないでしょうよ。」(167)

マシューのプレゼント以後のアンのワードローブはドラスティックに変化していく。マシューがリンド夫人に依頼したということがマリラのプライドを傷つけ、以後アンの服を最新流行に縫ってくれるようになる。これでアンは内実ともクスパート家の養女から実の娘同等の地位を獲得したといえる。マシューのプレゼントは茶色のパフ・スリーブのドレス一着にとどまることなく、その後も帽子や真珠の首飾りと、買い物リストは続く。アンはダイアナなりに、きれいな服飾品を買い与えられるようになるのである。もはやアンの精神性をしのぐ物質主義を挫くものはない。アンはそのような俗物性を自覚し恥じることはない。その普通の乙女らしさがアンの魅力である。服装は人に新たなアイデンティティを与えてくれるまたとない自己表現の手段である。

流行の服を着ていると、いい人になるのもずっとたやすいの。少なくとも私にとってはね。生まれつきいい人には洋服なんか関係ないでしょうけど。私たち、お洋服の話ばかりしていていけないかしら。マリラは罪深いことだって言うの。でも洋服の話はとても面白いものね。(192)

『赤毛のアン』の第31章は「小川と河が出合うところ」と題されている。児童文学研究家のカドガン、クレイグは『子どもの本の作者は因習上、ヒロ

インの生物学的な成長を描くのは控えられてきたので、アンやレベッカは全く非性的な存在であるがゆえに精神性が強調されなければならなかったと述べているが、この章の表題はロングフェローの詩「乙女」を踏まえたアンが初潮を迎えたことの暗示である。

おずおずと両足で立つ  
小川と河が出合うところ  
乙女時代と子ども時代が過ぎ去っていく

百年前の北米の性教育では少女が大人になることを「小川と河が出会う」という表現が使用されていた。アンが進学を控え、アヴァンリーの学校の最終学期を迎えたこの章ではアンが夏の間にも急激に身長が伸びたという身体的な成長の言及がある。

「新しく仕立てた服はどれも長めに縫ってくれて有難う、マリラ。あの深緑色の服はとてもきれいだし、スカートにひだ飾りがついていて、ものすごくうれしいわ。どうしてもなければいけないものじゃないけど、この秋はあれが流行なのよ、ジョーシー・パイなんか全部の服につけたのよ。たっぷりとしたひだ飾りがついていと思うと、余計に勉強に身が入るわ。心の奥底がしみじみと落ち着くのよ」

「確かにあれはまあ、ちょっといいもんだね」マリラも認めた。(209)

この時点ではすでに流行はパフ・スリーブではなく、ひだ飾りになっているが、余剰の表象であることには変わりない。アンは流行の服をまとってことで、共同体の一員であることに満足している。いまやマリラのアンへの愛情も満ち溢れるものとなっている。マリラのピューリタニズムは完全に失せ、かつての干からびたオールド・ミスはすっかり乙女心を取り戻し、マリラはアンのおしゃれ心も理解している。川の合流はアンが大人の女性の共同体に加入したことを意味し、アンとマリラの対等な心の交流も可能になる。アンとマリラは大人同士の親密な語らいをし、リンド夫人への見解も等しくする。

マシューはアンへの愛情に溺れて、村の店の上客として完全に商業主義のとりこになるが、アンがクイーンズ学院に進学する際には、もうマリラもマシューの浪費に文句をつけることなく、自らアンのお支度に加担する。アンはもはやマリラの自慢の娘であり、マリラもアンを世間並みの身支度をさせなければという義務感にかられている。

ある日の夕方、淡い緑色の優美な生地を腕一杯に抱えて、マリラは東の部屋に上がってきた。

「アン、これあんたの薄物のドレスにどうだろうね。立派な服をたんと持って



いるんだから、もう必要ないかもしれないけど、でも町で夜会か何かにお呼ばれした時、改まった服装もいるかと思ってね。聞くところによると、ジェーンもルビーもジョーシーも『夜会服』とやらを作ったそうじゃないか。あんたに引けをとらせたくないと思ってね、それで先週、アラン夫人に頼んで、一緒に町で見立ててきたんだよ。仕立てはエミリー・ギリスに頼んだよ。あの子は趣味がいいし、仕立て上がりにかけては並ぶ者がいないからね。」

そしてうす緑のドレスが完成した。エミリー・ギリスの好みが許す限りにたっぷりタックとフリルとシャーリングがついていた。(227)

このアンの欲望の勝利、マリラの敗北というプロットは、アンのクスバート家の本当の娘になるというプロットに平行して消費主義の是認という価値観のもとに成立する。消費主義は低年齢化して、少女の世界も席捲してゆく。

アンもジルーシャも協調性のある従順な少女である。勉強家で保護者の期待にこたえようと真面目に努力する。アンは赤毛で孤児で流行のパフ・スリーブをまとうことが許されなかったが、性格の魅力でクラスメイトには受け入れられた。だがアン自身は皆とお揃いでないというピア・カルチャーに適合していない事実から生まれる劣等感を克服することはできなかった。規範に追随しようとするがゆえに彼女は受動的に消費主義に巻き込まれていく。アンは目立つ赤毛という容貌とはうらはらに、精神的に流行や制度に抗うような強い個性はない。

音楽会の後、月夜にきらめく海の波頭を見て、アンがダイヤモンドを連想するくだりがある。アンがしばしば自然美に人工的な宝飾を連想するのは、商業主義に毒されているともいえる。しかし、本物のダイヤモンドより、真珠の首飾りのほうがいい、アメジストのほうが美しいというアンのコモンセンスに囚われない価値観には彼女の個性がある。結局、アンの愛情や幸福を物象化するのを、児童文学の限界と見るべきか。それとも消費主義の時代の風潮と見なすべきか。

しかしマリラを厳母から慈母に変えたのはアンの力である。順応主義はアンの愛されるキャラクターの大きな要素であり、それは消費主義と表裏一体をなしている。流行おくれのピューリタニズムは否定され、流行を追う消費主義は支持される—そのようなイデオロギーを映す鏡である少女小説は、少女文化において消費主義の生成と増殖に大きく作用しているのである。

彼女たちの幸福感は新しいドレスの所有によって生み出されるところが大きい。これらの作者たちは自立心旺盛で個性豊かな主人公から、こと服飾に関しては虚栄や他人志向をそぎ落とすことはしなかった。

### 『リンバロストの乙女』

『リンバロストの少女』(1909)を読むと少女が社会の中で生きるためには、いかに資金が必要かがわかる。リンバロストはインディアナ州のオナバシャ

に近い沼地である。主人公のエルノア・コムストックはジルージャやアンのように寄る辺のない孤児ではなかったが、彼女の誕生は夫の死という犠牲があったため、母親のキャサリン・コムストックは娘を憎み、疎んじていた。そのためエルノアは通学に苦痛を感じるほど、服装もおざなりにされていた。エルノアは精神的孤児であったが、学資を全て蛾や出土品を収集して売って自力で稼いだ。

世紀の転換前から卒業式のドレスは乙女の晴れ着だった。ハイ・スクールの卒業式は少女にとっての晴れの門出であり、意義深い通過儀礼であったので、それなりに手間と費用をかけたドレスの新調も重要であった(**Forman-Brunell 129**)。母親の用意した送別礼拝式のためのドレスが今年の着まわしであり、卒業式のドレスの支度も何もしていないことは、エルノアにとってこのうえない残酷な仕打ちであった。母が用意した、洗ってアイロンをかけた去年の夏の白い服を見たエルノアは落胆し絶望した。

エルノアは立ってられなくなって箱に腰をおろした。二時間とたたないうちにオナバシヤの教会に行っていなければならない。水をくぐった去年の服などとても着られない。他に何もなし、壁にもたれたエルノアの顔を父の外套が撫でた。エルノアはその服に力いっぱいしがみついた。

「ああ、お父さん！お父さん！」エルノアはうめいた。「お父さんがいたらいいのに！お父さんならこんなことはしなかったと思うわ！」

苦悶のあまり涙も流れず、外套にしがみついたまま、エルノアはどうしたらいいのか考えようとした。ついに彼女はドアをあけた。

「服が見つからないけど」

「なに、それ一つしか置いていないのだから、大して手間のかかるはずないと思うよ」

「お母さんは古い水をくぐった服を着ていけと言いなさるの？」

「あれはいい服だよ。穴も一つもあいてやしない。あれを着ちゃならないなどというわけはひとつもないよ」

「私が着ないというほかはね。卒業式の服も用意して下さらなかったの？」

「あれを今日よごしたとしても、もう一度洗う時間はたっぷりあるからね」  
(144)

コムストック夫人が去年の服の着まわしでよい、卒業式も送別礼拝式も同じでよいと思ったのは一概に母親の悪意というわけではなく、ピア・カルチャーについての無知、社会性の欠如である。だが母親に代わって、礼拝式も卒業式のドレスも、善き隣人たちがエルノアのために整えてくれた。「鳥のおばさん」はエルノアが誰よりも映えるドレスを魔法のように仕立ててくれた。少女に美しいドレスを与えてくれる教母の存在はシンデレラ物語のパターンで、少女小説にはたびたび現れる。礼拝式でそのドレスをまとったエルノアの姿を見た母親は過ちを悟った。

これらの20世紀初頭の少女小説に秘められたメッセージは、少女が社会的に認められて女として輝くためには、才能や個性のみでなく、服装へのそれなりの投資が必要なのであるという消費主義である。

### 大草原の小さな家シリーズ

第一次大戦後、アメリカでは機械化による大量生産の時代が到来し、衣服は既製品が主流となり、スカートの丈は短くなった。また婦人参政権が認められ、女性の社会進出が目立った。1920年代後半には「消費は美德」という風潮がアメリカ社会に蔓延し、分割払いのクレジットがアメリカ経済を活性化した。パリに始まった豪華なデパートメント・ストアがアメリカの都会にも出現し、新たな消費という娯楽環境が整備された。地方の人々は通信販売という流通の革命の恩恵を受けた。

ローラ・インガルス・ワイルダーの娘ローズ・ワイルダー・レイン(1886-1956)は貧しい自作農の娘として不幸な少女時代を過ごした。つぎのあまった服、そまつな弁当に裸足で通学しなければならない、惨めな思いをした。彼女は頭脳優秀だったが、家庭の経済事情のため大学には進学せずハイ・スクールを卒業すると、電信技士の資格を取りカンザスで就職したが、少女時代の鬱屈を晴らすかのように高給をとり都会の消費生活を享受した。その後ジャーナリストとして頭角をあらわしたが、大恐慌で貯蓄を失うと、老親の経済的自立を図り、母親に子ども時代の開拓農家の生活について書かせ、加筆修正して子ども向けの「大草原の小さな家シリーズ」として世に出した。ローズはフーバー大統領の支持者として伝記を書き、長らく文通を続けたが、後年リバタリアンとしてルーズベルトのニューディール政策に反抗し、税金支払いも拒否し、晩年母と同じ自給自足の農園生活に落ち着いた。1930年代から40年代にかけて発表された大草原の家シリーズに描かれた開拓生活は消費主義を転覆させ、裕福な村の雑貨屋の娘のネリーの物質的豊かさは心の貧しさと表裏をなして幸福と結びつかない。所帯をもったアルマンゾ・ワイルダーの信用借りは新婚夫婦の不幸を増させた。(Stoneley 137-40) このシリーズにはローズの母との相互的な反消費主義のイデオロギーがこめられていると考えてよいだろう。v

### 1950年代

戦後のアメリカは戦地から帰還した男が所帯を持ち、女性は専業主婦になることが期待され、1950年代は家庭信仰の時代となり郊外族が出現した。戦時中に抑圧されていた欲望が解放され、消費需要が高まり、経済的繁栄でまたもや物質主義が肯定されるようになった。夫を支え、子どもを育てるといふ専業主婦としての存在が重視されたが、そのような理想的な役割をこなせない女性は少なくなかった。

『アメリカの少女』(邦題『思春期』)は1970年代に出版されたが、1950年代アメリカの平凡な中流家庭に育つ少女を描いている。これまで挙げたい

わゆる「家庭小説」とは趣きを異にしている。ニュージャージーに住む少女の父は弁護士であるが、仕事が思うようにいかない。母親はアルコール中毒で、物が雑然と溢れかえった家で両親の喧嘩を子供たちは日常茶飯事としてみている。姉のシリアは大学進学のため家を出る。弟のジョニーは幼すぎてまだ何もわからない。物質主義的風潮に翻弄されている主人公の少女は、その果てしない欲望と決して満たされない空虚さのなかであがいている。

ママはときどき洗濯をしていたけど、なん曜日には洗濯ときめてやっていたわけじゃないから、だいたいいつもあちこちに洗濯物が散らかってる。押入れの中や地下室の床には、洗濯物が山と積まれていた。なにか探し物をするとなると、古い靴や冬物の服や麦わら帽、赤ん坊の防寒服、そのほかいろんな unnecessary なものをかきわけて探さなきゃならない。ママはどこにあるのか全然わかってない。いつでもどこそこの山の中にあるんじゃない、というだけ。(55-56)

酒びたりでだらしなく家事能力のない母親は 50 年代の理想の主婦像の陰画である。洗濯物を色ものと分別せず、下着を染めてしまったり、シリアの新学期用に揃えた新品の服を救世軍に出してしまう。少女は自分なりに家庭を素敵にしようと努力し、服飾や化粧のことで頭がいっぱいである。ベビーシッターのアルバイトをして稼いだお金の使途をこまごまと記録する。ある日突然シリアは大学の宿舎で自殺をする。姉の死について、ただ姉の遺品をわがものとするのでワードローブが豊かになった喜びのみで、主人公の悲嘆はひとことも記されてはいない。

シリアは私よりも背が高かったけど、大学では短いのがはやっていたから、どのスカートも着られた。高校では短いのはまだ「ニュー・ファッション」だった。クリスマス休暇が終わって一月三日に学校がはじまったとき、はじめてシリアの水色のセーターとスカートを着ていった。それからだんだん、他のものも着るようになり、自分のスカートにシリアのセーターを組み合わせたりするようになった。着るものがたくさんあって、朝、頭を痛めないで済むのはほんとにいい。それから、シリアの物は、下着まで着るようになった。ブラジャーは大きすぎたけれど、そのほかはみんなちょうどよかった。男の子にもてるようになったのも、服のおかげだと思う。ロニー・ゼングラーとドム・ストラッサはそれまで私に話しかけてきたこともないのに、いっしょに並んで歩いて教室に行くようになった。(154)

少女の一人称の語りで少女の名前はわからない。その匿名性はこのような境遇の少女が当時のアメリカに無数にいたことを暗示する。この作品は物質主義と消費主義に浸食されたアメリカ社会の病いを描いているのである。この作品の情感を欠いたシンプルな文体は、却って感覚が麻痺してしまったかのような、やるせない救いようのない状況を語る効果があり、年代からいっ

て作者の少女時代の実話ではなかったかと思われる。

19世紀後半から20世紀にかけてアメリカに出現した商業主義は少女たちを巻き込んで、もはやピューリタニズムも、キリスト教精神も、いかなる指針も消費主義に抗う力はない。数十年かけて日本にもその波が打ち寄せてきた。アメリカの影響はファッション・スタイルばかりでなく、そのおしゃれの精神、女性の装いにおける消費主義を肯定する姿勢が翻訳小説をも通して日本の少女に浸透したのは否定できない。

### 使用テキスト

Louisa M. Alcott, *Good Wives Little Women Part II*. (1869) Puffin, 1978.  
Patricia Dizenzo, *An American Girl*. (1971) NY: Avon Books, 1976.  
Lucy Maud Montgomery, *Anne of Green Gables*. (1908) Puffin, 1977.  
Gene Stratton Porter, *A Girl of the Limberlost*. (1909) Applewood Books.  
Jean Webster, *Daddy-Long-Legs*. (1912) Digireads.com Book, 2009.  
Kate Douglas Wiggin, *Rebecca of Sunnybrook Farm*. (1903) Applewood Books.

本文中のテキスト引用の日本語訳は、以下の翻訳を参照し、現代語にあわせて多少の語句の変更をほどこした。

オルコット、吉田勝江訳『続若草物語』角川文庫 1952年  
パトリシア・ディゼンゾ、村田靖子訳『思春期』角川文庫 1980年  
モンゴメリ、村岡花子訳『赤毛のアン』新潮文庫 1954年  
ジーン・ポーター、村岡花子訳『リンバロストの乙女』角川文庫 1963年  
J.ウェブスター、松本恵子訳『足長おじさん』新潮文庫 1954年  
ケート D.ウィギン、大久保康雄訳『少女レベッカ』角川文庫 1971年

### 参考文献

Dorothy Banks, *The Adolescent Girl in Psychology and Literature. Junior-Senior High School Clearing House*, Vol. 5, No. 10 (Jun. 1931), 608-620.  
Ed. Miriam Forman-Brunell, *Girlhood in America: An Encyclopedia*. ABC-CLIO, 2001.  
Mary Cadogan & Patricia Craig, *You're a Brick, Angela: A New look at Girl's Fiction from 1839-1975*. London: Golancz, 1976.  
Daniel Thomas Cook, *The Commodification of Childhood*. Durham & London: Duke UP, 2004.  
Gary Cross, *An All-Consuming Century: Why Commercialism Won in Modern America*. Columbia UP, 2000.  
Shirley Foster & Judy Simons, *What Katy Read: Feminist Re-Readings of 'Classic' Stories for Girls*. Macmillan, 1995.

- William Holtz, *The Ghost in the Little House: A Life of Rose Wilder Lane*. University of Missouri P, 1993.
- Elizabeth B. Hurlock, *The Psychology of Dress: An Analysis of Fashion and its Motive*. NY: Ronald Press Company, 1929.
- Ed. Marvis Reimer, *Such a Simple Little Tale: Critical Responses to L.M. Montgomery's Anne of Green Gables*. Oxford: The Children's Literature Association & The Scarecrow Press, 2003.
- Peter Stoneley, *Consumerism and American Girls' Literature 1860-1940*. UK, Cambridge UP, 2003.

---

i 巻末に掲載された読者の便りには装丁への賞賛が少なからずある。

ii 読売新聞「昭和時代」第一部 30年代(22) 変わる女たち 2011年9月24日朝刊 17面

iii 'Buying into womanhood' Stoneley, *Ibid.* pp. 1-18.

iv 越智博美 「『あしながおじさん』と1912年のモテ系女子大生」管聡子編『〈少女小説〉ワンダーランド 明治から平成まで』明治書院、2008年 p.51.

v *The First Four Years* (『はじめの四年間』)のみはローズの死後1971年出版された。つまりローズの手が加えられていない純粋なローラの原稿である。